

# 「学習目標」と「評価方法」の整合性を高めるための シラバス作成支援ツールのプロトタイプ開発

Prototype Development of Support Tool for improve Congruence  
among the Learning Objective and their Assessment Method in Course Syllabus

藤本 祥之\*1,2      平岡 斉士\*1      鈴木 克明\*1      中野 裕司\*1  
Yoshiyuki FUJIMOTO      Naoshi HIRAOKA      Katsuaki SUZUKI      Hiroshi NAKANO

熊本大学大学院教授システム学専攻\*1  
Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University  
追手門学院大学教育開発センター\*2  
Center for Educational Development, Otemon Gakuin University

〈あらまし〉本研究は、大学の個々の授業で教員が学生の学習（学修）成果を適切に把握・評価できるようになることを目的として、授業の設計図であるシラバスの「学習目標」と「評価方法」の整合性を高めるための支援ツールを、教育の効果・効率・魅力を高めるための体系的な方法論であるインストラクショナルデザイン（ID）の理論に基づいて設計・開発・評価しようとするものである。本発表では、ガニエの「学習成果の5分類」に基づき設計・開発したプロトタイプについて報告する。

〈キーワード〉 シラバス 学習成果 学習目標 評価方法 インストラクショナルデザイン

## 1. はじめに

大学は、学生が習得すべき学習成果を明示するとともに、明示した学習成果を適切な測定方法で把握・評価することを求められている。大学卒業時に学生が習得すべき学習成果は各大学の「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）として、大学の個々の授業科目の終了時に学生が習得すべき学習成果は「学習目標（到達目標）」として授業シラバスに、それぞれ明示されている。

学習成果を的確に把握・評価するためには、習得すべき学習成果（＝「学習目標」）の到達度を測る方法（＝「評価方法」）が「学習目標」と適切に対応（＝「整合」）していなければならないが、シラバスに記述された「学習目標」と「評価方法」が「整合」していないことが少なくない（松田ら 2017）。個々の授業レベルで学生の学習成果を的確に把握・評価することができなければ、すべての授業が終了した卒業時の学生の学習成果を的確に把握・評価することはできない。それゆえ、教員が個々の授業シラバスを作成する際に「学習目標」に整合する「評価方法」を設計できるように支援するツールが必要である。

## 2. ツールの設計

本研究は、シラバスの「学習目標」と「評価方法」の整合性を高めるための支援ツール（Web サ

イト上で利用可能なジョブエイド）を、ID 理論に基づき、設計・開発・評価するものである。

開発するツールは、ID 理論に基づき設計・開発されたシラバス作成支援ツールの先行事例であるジョッケル（G. Joeckel）らの PDF Syllabus Builder と笠井らのシステムの調査・分析結果をもとに、ガニエ（Robert M. Gagné）の理論を援用して設計することとした（藤本ら 2017）。

ガニエは学習成果を質的な差によって「言語情報」・「知的技能」・「認知的方略」・「運動技能」・「態度」の5つに分類し（「学習成果の5分類」）、各「学習成果の種類」に整合する「目標行動」（「学習成果」が習得されたかどうかを測るために学習者に求める具体的行動で、「学習目標」の記述文の動詞になる）と「評価方法」とを提案している（鈴木 1995）。開発するツールでは、作業画面上で「学習成果の種類」の選択肢と「目標行動」・「評価方法」の選択肢とをそれぞれ連動させることにより、作成されるシラバスの「学習目標」と「評価方法」の整合性を高めることが期待できる。

## 3. 開発したプロトタイプの概要

開発したプロトタイプでは、ユーザは画面上で「科目名の記述」・「到達目標と評価方法の記述」・「評価割合の記述」の作業をそれぞれ行う。「到達目標」は10まで、「評価方法」は「到達目

図1. 「到達目標と評価方法の記述」画面の一部

標」ごとに3つまで、追加・削除が可能である。  
 「到達目標と評価方法の記述」画面の一部を図1に示す。この画面では、ユーザは作業1～7を順次進めるが、各作業は、「到達目標」に整合する「評価方法」を設計するための課題分析をもとに階層化した課題1～7にそれぞれ対応する。「評価方法」の記述作業は、第一著者が勤務する追手門学院大学のシラバス形式に合わせて、①「評価の種類」の選択（「試験による評価」・「課題による評価」・「観察による評価」からの）、②「評価の方法」の選択（「授業時間内の試験」・「授業時間内の活動の観察」・「期末試験」からの）、③「評価条件」の選択、④「評価基準」の選択、の4段階に分けた。「到達目標」に整合する「評価方法」を設計するための課題1～7とプロトタイプの実作業1～7の選択肢との対応を図2に示す。

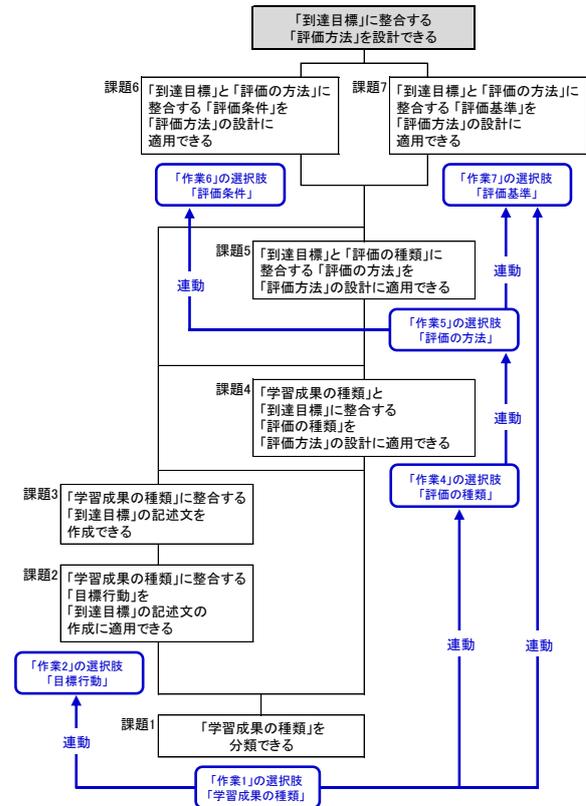


図2. 「到達目標」に整合する「評価方法」を設計するための課題1～7とプロトタイプの実作業1～7の選択肢との対応

#### 4. おわりに

開発したプロトタイプについては、今後、形成的ユーザビリティ評価（専門家評価と大学教員を対象とするユーザテスト）を実施し、改善を行う。

#### 参考文献

藤本祥之，平岡斉士，鈴木克明，中野裕司（2017）「学習目標」と「評価方法」の整合性を高めるためのシラバス作成支援ツールの開発 - 先行事例の調査・分析による設計指針の作成 -，日本教育工学会 第33回全国大会（島根大学）発表論文集，607-608  
 松田岳士，根本淳子，鈴木克明（編著）（2017）教育工学選書Ⅱ 第14巻 大学授業改善とインストラクショナルデザイン，ミネルヴァ書房  
 鈴木克明（1995）放送利用からの授業デザイナー入門，財団法人 日本放送教育協会